

アメリカの大学図書館における利用教育の実際

— 1920, 30年代を中心に—*

小山 憲 司**

1920, 30年代のアメリカの大学図書館において、実際にどのような利用教育が展開されていたのかを、当時の調査研究と雑誌論文から考察した。その結果、まず1926年のALAの調査研究によって、図書館利用教育の定義が明確化され、それには3つの類型が存在することが示された。また、一般に講義と実習というラボラトリー・ワーク形式を基本とした利用教育が行われており、その際には、図書館利用案内やテキストブック、映画等のツールが利用されるようになったことも明らかとなった。

このように、大学図書館の利用教育は、1920年代には主要な図書館サービスの1つとして見なされるようになっており、そこには、今日の利用教育の原型と呼べるものを見出すことができた。その意味で、1920, 30年代は、図書館利用教育史において、重要な時期であると考えられる。

目 次

はじめに

1. 図書館利用教育の実施状況
 2. 図書館利用教育の実施内容
 - 2.1 新入生オリエンテーション
 - 2.2 通常科目と連携した図書館利用教育
 - 2.3 独立科目として提供される図書館利用教育
 3. 図書館利用教育の実施方法及びそのツール
 - 3.1 講義と練習問題
 - 3.2 図書館利用案内
 - 3.3 テキストブック
 - 3.4 展示
 - 3.5 映画
 4. 結論
- 注・引用文献

はじめに

アメリカの大学図書館における利用教育の起源を19世紀後半とする見方は、タッカー (John M. Tucker) の論をはじめとする諸研究に見いだすことができる¹⁾。それから約1世紀が過ぎ、図書館利用教育は、アメリカの大学図書館において欠くことのできないサービスの1つと認められるに至っている。この間のアメリカの図書館利用教育史を紐解いてみると、その起源を19世紀後半に見いだせるものの、これが活発化し、図書館員の関心を強く引くようになったのは1970年代以降とする解釈が多いように思われる²⁾。

こうした解釈が成り立っている背景の1つに、1970年代に大学図書館界全体で様々な活動が行われるようになったことがあげられよう。例えば、1971年に大学・研究図書館協会 (Association of College and Research Libraries, ACRL) 内に図書館利用教育タスクフォースが設置されたことや1977年に同組織によって図書館利用教育に関するガイドラインが制定されたこと³⁾、さらに1972

* 1999年3月25日受理 1999年6月17日改稿受理

** こやま けんじ 中央大学大学院

年に情報交換の場としてクリアリングハウス LOEX (Library Orientation-Instruction Exchange) が設置されたことなどが、その顕著な例である。

翻って、それ以前の時代はどのような状況であったのだろうか。確かに上記のような例は見受けられないが、図書館利用教育が着実に普及していたことは、それぞれの時代の事例紹介論文や実態調査研究、その他の研究からも明らかである。特に、1920, 30年代は、アメリカ図書館協会 (American Library Association, 以下 ALA) が調査を実施し、ショアーズ (Louis Shores) がライブラリー・カレッジ構想を提唱し、ブランズコム (Harvie Branscomb) が *Teaching with books* を著した時期として、注目に値する⁴⁾。この時期は、研究志向機関であった大学が、教育機関としての役割を果たしていこうとする改革の時代にあつて、大学図書館もまた教育的機能の役割を求められた時代であった⁵⁾。その中で、彼らは、その方法こそ違うものの、大学教育の中における図書館の教育的役割をいかに果たしていくかということを探し、その中心的なサービスとして図書館利用教育を位置づけたのである⁶⁾。

このような利用教育論という観点からすれば、この時期は、図書館利用教育史の中で重要な時期の1つと考えることができる。しかしながら、実際に大学図書館で、どのような利用教育が展開されていたのかを考察した研究は見当たらない。

そこで、本研究では当時の実態調査研究と事例紹介論文の両面から1920, 30年代にどのような図書館利用教育が展開されていたのかを考察する。というのも、図書館利用教育を支えた理念とともに、実際にこのサービスがどのように実践されていたのかを明らかにすることは、図書館利用教育史研究にとって必要であると筆者は考えているからである。

本稿では、まず当時の図書館利用教育がどの程度行われていて、具体的にどのような内容であったのかを、実態調査研究や事例紹介論文から見ていく。次に、図書館利用教育の状況が明らかになったところで、どのような方法やツールが利用されて、このサービスが行われていたのかを検討する。最後に、当時の状況をまとめながら、図書館利用教育史における1920, 30年代の位置づけに

ついて考察してみたい。

1. 図書館利用教育の実施状況

図書館利用教育の実施状況は、タッカーが1920年代を調査の時代と称しているように、当時のいくつかの調査研究から伺い知ることができ⁷⁾。本章では、当時行われた調査研究のうち、一番規模の大きかったALAの行った公立及び大学図書館の調査を中心に、1920, 30年代の図書館利用教育の状況について見ていくことにする。

この調査研究は、ALAの図書館調査委員会 (Committee on Library Survey) がアメリカ全国の公立及び大学図書館を対象に実施したもので、その報告書は *A survey of libraries in the United States* (以下ALA調査) として1926年に出版された⁸⁾。調査方法はアンケート調査によるもので、1924年11月に調査用紙を送付、翌1925年の12月31日までの回答を有効とした。その対象が公立図書館と大学図書館であったこともあり、報告書の内容も公立図書館と大学図書館の2本立てとなっている。このうち、大学図書館には蔵書5,000冊以上の711館に調査用紙を送付し、261の図書館から回答を得た (回収率は36.7%)⁹⁾。

大学図書館における利用教育についての調査結果は、図書館サービスを主に扱った第2巻に記載されている。これによると、回答館261のうち、20,000冊以上の蔵書をもつ図書館の約半数で図書館利用教育が行われていた。また、これ以下の蔵書をもつ小規模の図書館では、その4分の1が同サービスを行っていた^{10) 11)}。

ところで、ALA調査第1巻の冒頭部分でも述べられているように、この調査は単に図書館あるいは図書館サービスの現状を数字によって把握しようとしたものではなかった。むしろ、これらを個別的に、そして具体的に記述することに重きがおかれた。これは、1つには、図書館あるいは図書館サービスの現状を具体的に示すことで、今後の図書館あるいは図書館サービスを考えていく上で、何らかの材料を提供しようとしたためであると考えられる。そのため、図書館利用教育の調査結果の例を見てもわかるように、数字による調査結果の提示は極力控えられており、むしろ調査用

紙に記述された内容から、①一般に普及している図書館実務の正確な状況を提示すること、②一般に普及している実務とは異なっているが重要と思われる実務についても記述すること、③いずれにおいてもとても興味深いと思われる実務のいくつかを記述すること、の3点に主眼点が置かれた¹²⁾。

こうした観点から作成されたALA調査は、図書館利用教育の形態には、新入生オリエンテーション、通常科目(regular course)と連携した図書館利用教育、そして独立科目として提供される図書館利用教育の3つの型があることを示し、それぞれの具体的な事例について調査用紙にもとづきながら記述している。

このように調査用紙にもとづいて、図書館サービスの実態を記述する方法は、1914年の連邦教育局(U.S. Bureau of Education)による調査報告(以下教育局調査)でも行われている¹³⁾。これは、1913年に大学、カレッジ及び師範学校(normal schools)を対象に、図書館利用教育の実施状況について調査したものである。このうち、大学及びカレッジには596校に調査用紙を送付し、446校から回答を得ている(回収率74.8%)。調査の結果、回答のあった446校のうち、図書館利用教育を行っているという回答した大学及びカレッジは、その約2割にあたる91校であった。そして、教育局調査では、これら91校の図書館利用教育の状況が州ごとに記述されている。

さて、これら2つの調査報告を比べてみると、調査用紙をもとに、当時の図書館利用教育の状況について記述したこと共通点が見られるものの、その内容の記述のし方には大きな違いが見られる。すなわち、ALA調査では利用教育の内容について3つの類型があることを提示し、これにもとづいて、その具体例を記述しているのに対し、教育局調査では各大学図書館の事例を州ごとに区分けして記述しているという点である。教育局調査では、調査結果の1つとして、図書館利用教育を必修科目として提供している大学及び選択科目として提供している大学がそれぞれ列挙されているものの、その方法や内容についての分析結果は特に示されていない。

さらに、図書館利用教育そのものとのとらえ方についても、両者は大きく異なっている。というの

も、ALA調査では、図書館利用教育の範囲を、“学生に図書館の利用方法について指導するものであり、図書館員の養成や印刷物の歴史について扱うものは除く”¹⁴⁾と明確に定義し、その事例をこの範囲内で提示しているのに対し、教育局調査の事例の記述では、これらが混在して扱われているからである。教育局調査の場合、その標題にもあるように、調査目的を図書館利用教育(library instruction)としているものの、これに該当するものとして、図書館員養成科目や書誌(bibliography)¹⁵⁾も含まれていた。そのため、報告書に掲載された事例を見る限りにおいては、特にその方法や内容が吟味されることなく、回答を得た91校すべての事例が掲載されていた。

このように、同じ主題を扱った調査報告においても、両者に違いがあることは明確である。そして、①図書館利用教育と図書館員養成科目をはっきりと区別し調査結果を示したこと、②調査用紙の記述内容から新入生オリエンテーション、通常科目と連携した図書館利用教育、独立科目として提供される図書館利用教育の3つの類型を提示したこと、の2点が、ALA調査の大きな意義であったと考えられる。

2. 図書館利用教育の実施内容

1章で扱ったALA調査は、それまでの視点とは異なり、当時の図書館利用教育には新入生オリエンテーション、通常科目と連携した図書館利用教育、独立科目として提供される図書館利用教育の3つの類型があることを提示し、この枠組みの中でそれぞれの事例を列挙していた。そこで本章では、この3つの類型に従って、当時どのような図書館利用教育が展開されていたのかを、ALA調査に掲載された事例を中心に、また雑誌等に掲載された事例紹介論文も参考にしながら検討する。

2.1 新入生オリエンテーション

ALA調査では、新入生オリエンテーションによる図書館利用教育が、アメリカの大学図書館において最も一般に普及している例として取り上げられている。調査報告によると、これは1時間か

2時間の講義と図書館員の付き添いのもとでの図書館ツアー (a tour of the library), そして目録や参考図書を使った練習問題が課されるとしている¹⁶⁾。また、カーネギー財団 (Carnegie Corporation of New York) の依頼を受け、アメリカの大学図書館の実態を調査したランドール (William M. Randall) が1932年に著した *The College Library* においても、同様の報告がなされている¹⁷⁾。

ALA 調査には、その具体的な内容として、11の大学図書館の事例が掲げられているが、ここでは、その典型的な例として、*Library Journal* にも掲載されたメイン大学図書館の事例を取り上げることにする¹⁸⁾。

メイン大学は、フレッシュマン・ウィークの中で、大学の教育方法や学習の仕方、ノートのとり方、学科試験といった大学生活全般にわたる講義の1つとして、図書館員が利用教育を担当し、これに4時間が充てられた。その内容を略述すると、以下の通りである。

まず、1時間目は図書の分類・排列、目録、参考図書・索引、図書館規則に関する講義に充てられた。講義の際には、図書館利用に関する簡単な説明やデューイ十進分類表、図書館利用規則などが掲載された、4ページからなるリーフレットが用いられた。2時間目には、館内施設や図書の配置、目録や雑誌記事索引、一般的な参考図書類の利用のし方を案内する図書館ツアーが行われた。蔵書目録の利用の仕方について説明するときには、館内に掲示してあった著者名目録カード、タイトル目録カード、主題目録カード、参照カードといった、カード目録の例が用いられた。残りの2時間は、1, 2時間目に学んだ内容に関連した練習問題を解く時間に充てられた。その内容は、①カード目録の利用及び資料の配置、②基本的な8つの参考図書の利用、③雑誌記事索引の利用、の3つで、それぞれに4問、4問、3問が課せられた。

上記のような図書館利用教育は、図書館を利用する上で基本的な内容、すなわち目録や雑誌記事索引の使い方、基本的な参考図書の使い方、館内施設の配置の説明などが主であり、概ね2時間から4時間が充てられた。また、これらのプログラムは図書館員が担当しており、ALA 調査によれ

ば、インディアナ大学やノースウェスタン大学、ラドクリフ・カレッジでは、特にレファレンス・ライブラリアンが担当していた。

この種の利用教育と同様の例は、ブラウン大学図書館¹⁹⁾ やメリーランド州立教員養成カレッジ図書館²⁰⁾、ウィリアムズ・カレッジ図書館²¹⁾ の事例紹介論文にも見ることができる。

2.2 通常科目と連携した図書館利用教育

通常科目と連携して図書館利用教育を行う場合、国語 (English) と連携して利用教育を提供する事例が多かったようである。これは、国語が1, 2年生の必修科目であるので、大学入学者全員に利用教育を提供することができると図書館側が考えていたからであろう。ALA 調査では、その具体的な事例として5つの大学図書館の事例が示されている。例えば、その1つハミルトン・カレッジでは、1年生には必修科目である国語の時間に、2年生には同じく必修科目であるディベートの時間に、図書館員による図書館の利用の仕方についての講義が2, 3時間行われ、練習問題などが課された。

上記のような利用教育の例は、事例紹介論文の中にも見出すことができる。例えば、リーハイ大学図書館では、図書館員が1年生を対象に国語の授業の中で利用教育を行っていると報告している²²⁾。同大学の利用教育は、講義と練習問題の大きく2つの要素から成り立っており、講義は図書館利用に関する概説的な内容で、1時間分が充てられた。続いて、3週にわたって毎時間5問の練習問題が課された。練習問題を3週にわたって課したのは、学生に少なくとも3回は図書館に足を運ばせる機会を与え、カード目録や参考図書の利用法を身につけさせることを目的としていたからである。練習問題の内容は、カード目録の利用の仕方、いくつかの参考図書の利用の仕方などが中心であった。

リーハイ大学図書館の他に、国語科と連携して図書館利用教育を行った大学図書館の例は、ルイジアナ州立大学図書館²³⁾、ワシントン大学図書館²⁴⁾、シラキューズ大学図書館²⁵⁾ があげられる。ここで取り上げたハミルトン・カレッジ図書館やリーハイ大学図書館では練習問題を課していたが、ル

イジアナ州立大学図書館やワシントン大学図書館のように、練習問題と同時にレポートの提出を課した大学図書館もあった。国語の授業の目的の1つに論文の書き方の修得等があることを考えれば、納得のいく方法であるといえる。

上記で取り上げた大学図書館では、いずれも図書館員が国語の授業の一部を使って、利用教育を行っていた。その一方で、国語科の教員自身が、利用教育を行っている大学もあった²⁶⁾。もちろん、いずれの場合においても、大学図書館と国語科との協力が不可欠であった。

2.3 独立科目として提供される図書館利用教育

3つ目の類型は、図書館利用教育がカリキュラムの中で独立した科目として提供されている事例である。ALA 調査には、これにあたる17の具体的な事例が列挙されている。2.1及び2.2に示した図書館利用教育の場合、その対象が主に1, 2年生で、基本的にすべての学生に必修であったが、この類型の利用教育の場合、その対象は1年生から大学院生まで幅広く、必修あるいは選択科目として提供された。また、その内容も基本的、一般的な図書館利用法から大学院生向けの書誌作成まで様々であった。ここで、ALA 調査で取り上げられた17の事例の特徴について整理してみると、次のようになる。

①必修・選択の別

一般的に選択科目として提供している事例が多い。また、所属学部、学科によって、必修あるいは選択とする大学もあった。

例えば、オレゴン州立農学カレッジでは、農学、商学、家政学、職業教育学、音楽学科の1年生は、図書館利用教育が必修科目であったが、その他の学科の学生は選択科目であった。

②授業時間数及び期間

他の学科目と同様、週に1から2時間、1学期間を基本としている。夏学期に提供している大学もあった。

例えば、コロラド大学では、夏学期に講義に20時間、練習問題に25時間を充てる図書館利用教育が提供されていた。

③対象

特に対象学年を明示していない事例が多く見受けられた。これは、調査用紙にその対象が明示されていなかった、あるいはどの学年でも受講可能である、のいずれかであると考えられる。それ以外には、1年生のみを対象にしたものから大学院生を対象にしたものまで様々であった。

④内容

基本的な図書及び図書館の利用法を中心とする事例が多く見受けられた。それ以外には、書誌をその内容とする事例もあった。これは、4年生あるいは大学院生を対象とする科目に多く見受けられた。

例えば、プリンストン大学では、古文書学(palaeography)を専攻する大学院生を対象に専門分野に関する書誌やそれに関連する図書館学の科目を提供していた。

⑤科目の実施方法

講義を基本としながら、リーディング・アサインメント(reading assignment)やレポート、練習問題、書誌作成を課す事例が多かった。

独立科目として提供される利用教育の事例は、大学便覧においても確認することができる。例えば、1939-40年度のカリフォルニア大学パークレー校の便覧によると、図書館利用教育を独立した科目として提供している例は、全部で4学科4科目あった²⁷⁾。まず、歴史学科では、3年生の必修科目として「101 歴史学的方法及び書誌概論(Introduction to Historical Method and Bibliography)」が提供されていた。科目概要によれば、これは週2時間、3単位科目で、1学期間にわたって行われたものである。その内容は図書館の利用のし方及び書誌作成の2つからなっていた²⁸⁾。

2つ目に、パブリック・スピーキング(Public Speaking)学科では、歴史学科と同様、3単位科目として「120 図書館利用(The Use of the Library)」が提供された。これは選択科目で、カード目録や辞・事典類、年鑑や地図、書誌の利用といった基本的な内容を扱っていた²⁹⁾。

3つ目に、政治学科では、「200 政治学における書誌及び研究方法(Bibliography and Research

Methods in Political Science)」という科目が提供されていた。これは、大学院で開講されている科目で、政治学を中心とした研究方法、文献、政府文書などの利用を扱った科目であった³⁰⁾。

最後に、上記の3つとは異なった性格の「101 図書館利用と一般書誌 (Library Use and General Bibliography)」という科目が図書館学科で提供されていた。これは、図書館学科の専門教育科目としてではなく、2年生であれば誰でもとることのできる選択科目であった。学生の専攻は特に制限していないが、その内容は主に社会科学系の学生を対象にしたものであったようである。週2時間、2単位科目で、講義の他に練習問題も課された³¹⁾。

上記以外にも、2.1に見たような新入生を対象とする図書館利用教育も行われていた。新入生に必修ではなかったが、学期始めの数日間に、1日数回にわたって行われる「図書館オリエンテーション・ツアー (Library Orientation Tour)」がそれである³²⁾。また、2.2に見たような国語科との連携のもとでの利用教育も行われていた³³⁾。

カリフォルニア大学バークレー校では、新入生オリエンテーションから独立科目まで、様々な機会を通じて、図書館利用教育が提供されていたが、ピーターソン (Kenneth G. Peterson) によれば、これらの活動は大きく2つに分けられるとしている³⁴⁾。すなわち、「図書館オリエンテーション・ツアー」や国語科との連携による利用教育は、図書館員が担当する図書館サービスの1つであったが、それ以外の各学科で提供された独立科目は、その学科の教員が、カリキュラムの1つとして提供したものであり、図書館サービスとは別のものであった。

このように、独立科目で提供される図書館利用教育は、図書館員によるものから各学部・学科の教員が担当するものまで様々であったようだ。例えば、デンバー大学のヤング (A. Beatrice Young) の行った調査によれば、図書館利用教育科目を提供していると回答した67の大学及びカレッジ図書館のうち、その科目を図書館員が担当していると回答したのは53館、国語や歴史等の各学科の教員が担当していると回答したのは13館であった。残りの1館では、図書館員と国語科の教員が

分担して担当していた³⁵⁾。教員が図書館利用教育科目を担当するケースは、特に主題知識に関連した書誌作成等を扱う、各学科で提供される独立科目で多く見受けられた³⁶⁾。

3. 図書館利用教育の実施方法及びそのツール

1章及び2章では、ALA調査を中心に当時の図書館利用教育の状況及びその内容について見てきたが、そこでは様々な方法やツールが用いられていたことがわかった。本章では、視点を変えて、図書館利用教育を提供していく上で、当時どのような方法やツールが用いられていたのかを上述のALA調査の事例や雑誌に掲載された事例紹介論文から見ていくことにする。

3.1 講義と練習問題

最も一般的に用いられた方法が、講義とともに練習問題や宿題を学生に課するというものであった。このように、学生が図書館の利用方法を練習問題を通じて学習するという方法は、一般にラボラトリー・ワーク (laboratory work) と呼ばれていた。この用語は、自然科学系の学問で行われている、講義等で学習した理論を実験室で実際に試してみるという学習方法を、他の人文科学系や社会科学系の学問にも応用したところから用いられた。ただし、理論を確認する場はいわゆる実験室ではなく、彼らの学習・研究の中心となる図書館であった。同様に、図書館利用教育においても、講義で得た知識を図書館で実際に使うことが必要であるとの考えから、このラボラトリー・ワークという方法が用いられた³⁷⁾。

ALA調査やその他の事例紹介論文には、こうした形式の図書館利用教育を提供している事例が数多くあった。これらの中には、図書館利用教育の内容に加え、その大学図書館で使っている練習問題のサンプルが掲載されているものもあった³⁸⁾。また、練習問題のサンプルのみを掲載した論文も見受けられた³⁹⁾。このように、雑誌を媒介として、他の大学図書館で行われている練習問題を参考に、大学図書館員が自館用の練習問題を作成することが可能であったことがわかる。

また、練習問題の内容だけでなく、その実施方

法にも様々な工夫が見られた。例えば、シラキュース大学図書館は、同大学の図書館学校の協力を得て、利用教育の中で取り上げられるカード目録や雑誌記事索引といった図書館ツールに応じて、練習問題を作成した。練習問題は大きく9つにグループ分けされており、それぞれのグループにはどのような図書館ツールを参照すればよいかをあらかじめ掲げてあった。学生はそこに掲げられた図書館ツールを使って練習問題に取り組むことで、それぞれの使い方を学ぶことができた。こうすることで、学生は1人で基本的な図書館ツールの使い方を学ぶことができ、その一方で図書館員は個々人に合わせた指導をすることができた⁴⁰⁾。

練習問題とは別に、書誌作成を課す大学図書館もあった。例えば、デンバー大学図書館では、1年生の必修科目として「書誌 (Bibliography)」を提供していた⁴¹⁾。この科目は週1時間、5週間にわたって行われるもので、1時間目にこの科目の概要説明と図書館に関する簡単な講義を行い、その後の4週間、学生には書誌作成が課された。作成する書誌の主題は、学生が自由に選ぶことができたが、同時に図書館側からも30の主題を掲載したプリントを用意して配布もした。必要に応じて図書館員は、授業時間外にも質問を受け付けるなどして、学生の書誌作成の支援を行った。こうした書誌の作成を通じて、学生が図書館の利用の仕方、図書館ツールの利用法を学び、さらに大学で学習をしていく上で重要な学習技術と考えられていた書誌作成を身につけることがこの科目の目標であった。

練習問題あるいは書誌作成いずれの場合にせよ、講義とともに実際に図書館を利用する機会を与えることを目的とした図書館利用教育が行われており、このような方法が当時の大学図書館で用いられていたことを上記から伺い知ることができる。

3.2 図書館利用案内

文献によれば、図書館利用案内 (library handbook) が最初に作成されたのは、ケンブリッジ大学であり、1905年前後のことであったという⁴²⁾。その後、今日に至るまで図書館利用案内は、図書館PRのツールとして定着してきたが、それと同

時に図書館利用教育の重要なツールとしてもその機能を果たしてきた。そして、ALA調査においても10の大学図書館が図書館利用案内を作成していたことが報告されており、これら利用案内が学生の図書館利用に役立つものであると評価している。

当時の図書館利用案内を知るためには、1937年の *Wilson Bulletin for Librarians* に掲載された“College Library Handbook”と題する論文が参考となる⁴³⁾。これは、図書館利用案内の作成の手引きといった類のものであり、当時の大学図書館で利用案内が普及し始めたことを物語るものとして興味深い。これによると、図書館利用案内には次の7項目を掲載することが一般的であったようである。

- ①導入：この出版物の目的
- ②館内案内：館内施設の案内や館内案内図など
- ③カード目録：目録カードの説明や請求番号、分類、書架の排列について
- ④雑誌記事索引及び新聞記事索引
- ⑤一般的な参考図書：参考図書の簡単な紹介など
- ⑥図書館利用規則、図書館員、開館時間
- ⑦様々な特定のサービス：予約サービスや相互貸借サービスなど

上記以外にも、大学図書館によって様々な内容が掲載されていたようであるが、それは紙面の都合によるところが大きかったようである。

また、その形態は、一般的には横4インチ (約10cm)、縦6インチ (約15cm) の大きさで、いわゆるポケットサイズと呼ばれる大きさであった。ページ数は約20ページのものがほとんどで、中には50ページを越えるようなものもあったようである。

こうした冊子体の図書館利用案内とは別に、リーフレット形式の利用案内を作成していた大学図書館もあった。例えば、ペンシルバニア州立カレッジ図書館では、学部学生用と大学院生用の2種類のリーフレットを作成していたということである⁴⁴⁾。また、2.1で取り上げたメイン大学図書館のリーフレットもこの例の1つということができる。

3.3 テキストブック

他の講義科目と同様、図書館利用教育においても市販のテキストブックが用いられた例があった⁴⁵⁾。このテキストブックは当初、個々の大学図書館で作成され、使用されていたが、その中には出版社から市販されるものもあった。この場合、テキストブックの購買者はその大学の学生であったが、その後テキストブックの内容が、どの大学の学生でも利用できるよう標準化され、一般に市販されるようになったものもあった。この例の1つが、H. W. ウィルソン社から出版された *Guide to the use of libraries* である。

このテキストブックは、イリノイ大学図書館の監修のもと、1920年に *Guide to the use of libraries; a manual for students in the University of Illinois* というタイトルで出版されたものが最初であった⁴⁶⁾。タイトルにもある通り、当初の読者はイリノイ大学の学生を想定していた。その後、1922年に出版された第2版では、新しい資料を加える必要がでてきたことと同時に、他の大学図書館でも利用できるようにとの配慮から、その内容はより一般的なものに改訂された。

ここでは、*Guide to the use of libraries, 4th ed.* (1929) を使って、その内容を見ていくことにする。このテキストブックは全部で29章から構成され、その内容から大きく2つの部分に分けることができる。前半部分は、図書館の利用のし方及び図書館ツールの利用のし方が主となっている。図書館の利用のし方では、図書館で使われている分類法やその見方、請求番号や書架上の図書の並び順などが図等も用いられながら示されている。また、図書館ツールの利用のし方では、カード目録や参考図書、雑誌記事索引などの特徴及び使い方が説明されている。後半部分では、主題ごとに参考図書類が列挙され、それぞれに詳細な説明がなされている。

こうしたテキストブックが1920年代から1930年代に市販されるようになってきた背景としては、アメリカの大学図書館界において、図書館技術の標準化が進んできたことがあげられる。つまり、1901年の議会図書館による目録カードの頒布に始まるカード目録の普及や目録規則の標準化、さらにはデューイ十進分類法や議会図書館分

類法といった分類法の普及などがそれである。また、こうした図書館技術の普及や標準化を支えたのは、専門職としての教育を受けた図書館員であったことも見逃すことはできない。このような背景と重なりあって、図書館利用教育の中でテキストブックが用いられるようになったのであるが、逆にテキストブックが市販され、広く利用されることで、どの大学図書館でもある一定レベルの図書館利用教育を提供することができる下地を作ったとも考えられる。

3.4 展示

日常の掲示物として、カード目録の利用法などが目録ケースの近くに掲示されるというのは、多くの大学図書館でも行われていたようであるが、ここで示すウィリアムズ・カレッジ図書館のように図書館利用教育の一部として、展示 (exhibits) が行われていた例もあった⁴⁷⁾。

同図書館では、1938年の新学期より、大学が主催するオリエンテーション・プログラムの中で図書館利用教育を提供し始めたが、それは大きく2つの部門に分けられた。1つは講義による図書館利用教育、そしてもう1つは展示による図書館利用教育である。

この展示は、大学全体のオリエンテーション・プログラムの1つとして行われたもの (Orientation Program exhibits) であり、その中にはウィリアムズ・カレッジの歴史についての展示やウィリアムズタウンの紹介の展示なども同時に行われた。図書館に関する展示としては、次のようなものがあった。

- ①「ある特定の資料が目録カード上ではどのように記入されているか」：大きく引き延ばした議会図書館目録カードとそれに該当する資料の展示。これは、図書館ツアーの際にも用いられた。
- ②「速読とノートのとり方」：表題についてのイラスト付きの展示。
- ③「本の正しくない利用のし方」：乱暴に扱われた図書や切りとられた図書などの写真や現物の展示。
- ④「代表的な大学での学習」：段階的なレポートの書き方などの説明。

⑤「大学での学習法」：表題に関する図書やパンフレットの展示。同時にワシントン大学で出版された *How to Study and Like It!* という実際に学習していく上でのヒントなどが掲載された8ページからなるリーフレットも用意され、配布された。

図書館利用教育の一環として、展示を利用することは、今日においてもユニークな発想である。こうした展示は、学生にとってはいつでも好きなときに見られ、学習の方法や図書館の利用のし方を視覚的にとらえることができるので、非常にインパクトのある方法であるといえる。また、展示は準備に多くの時間と人手をを必要とするかもしれないが、いったん展示が始まってしまえば、個々の学生が独自に学習できるという点で、非常に効率的な方法であるともいえる。

3.5 映画

展示と同様、視覚に訴える図書館利用教育の方法として、映画 (motion pictures) がこの時期から注目されるようになった。映画に対する注目は、1926年に行われたイングリッシュ (Ada J. English) の調査の中に見受けられる。イングリッシュは、新入生を対象とする図書館利用教育の実施状況について調査しているが、その中でヴァッサー・カレッジの図書館員から映画を利用することの可能性についての提案を受けたと報告している⁴⁸⁾。

そして、その約10年後には、実際に映画が図書館利用教育に用いられるようになった。1937年の *Library Journal* に掲載されたシカゴのベル・アンド・ハウエル社の広告がそれを示している⁴⁹⁾。その内容は、同社がイリノイ大学図書館学校の製作した図書館利用教育用フィルム *Found in a Book* を2日間4ドルで貸出をすといったものであった。さらに、この広告には、1936年度の貸出実績として、このフィルムが高校生、大学生あわせて5万人以上に上映されたことが報告されている。

図書館利用教育に映画を使う一番の利点は、一度に多くの学生にこのサービスを提供することができるという点であるが、調査報告や事例紹介論文からは、映画を利用した図書館利用教育の実際

については知ることができなかった。しかしながら、こうした広告を見ても、新しい技術が図書館利用教育に積極的に導入されていたことがわかる。

4. 結論

19世紀後半に開始されたと見られる図書館利用教育は、その後20世紀に入ってから、様々な実践が試みられ普及していった。それを示す顕著な例が、数々の調査報告である。例えば、1912年には、ALAが図書館利用教育に関する調査を行っている⁵⁰⁾。また、1914年に行われた教育局調査は、アメリカ高等教育界における図書館利用教育に対する関心の高さを示している。そして、1920年代には1926年のALA調査をはじめとして、イングリッシュやベイバー (C. P. Baber) といった大学図書館員個人による調査も行われた⁵¹⁾。こうした例を見ても、大学図書館界、アメリカ図書館界、そしてアメリカ高等教育界において、図書館利用教育に大きな関心が集まっていたことがわかる。

その中で、ALA調査は、回収率こそ36.7%と低かったものの、①図書館利用教育というサービスの範囲を明確化したこと、②図書館利用教育には新入生オリエンテーション、通常科目と連携した図書館利用教育、そして独立科目として提供される図書館利用教育の3類型が存在すること、の2点を示した点において、非常に意義のあるものであったといえる。

まず、当時の大学図書館界では、図書館利用教育を図書館員養成と混同している点が見受けられ、それが1914年の教育局調査にも表れていた。しかし、ALA調査ではこれを除外し、学生に図書館を利用するための知識あるいは技術を教育することを図書館利用教育と定義し、その方針のもとで、調査結果について分析し、報告している。このような定義は1912年のALAによる調査でも示されていたが⁵²⁾、1926年のALA調査において改めて明確な定義が示されたことは、その後の図書館利用教育の基礎を築いたといえることができる。そして、②にあげたような図書館利用教育の類型化は、1912年のALAによる調査や1914年の教育局調査にはなかった視点であり、これが今日

まで引き継がれているという点に、ALA 調査の意義を見出すことができる。

また、上記のような調査あるいは事例紹介論文からは、1920年代に入ってから様々な図書館利用教育が行われていたことを知ることができた。講義と実習というラボラトリー・ワーク形式を基本としながら、様々な図書館利用教育が行われた。実習では、練習問題や書誌作成が課されたが、これは講義の内容を実際に図書館で利用することで、学生がその知識を身につけることを目的としていた。さらに、この時期からは図書館利用案内やテキストブック、映画が利用教育に用いられるようになった。特にこの時期に映画が図書館利用教育に導入されたことは、1911年にハリウッドに最初の映画撮影所が建設され、1930年代には映画がアメリカの最大の娯楽になっていったという社会状況に呼応するものであった⁵³⁾。

このように新たに導入された方法やツールは、図書館利用教育の普及に貢献し、その標準化を進める下地を作ったと考えることもできる。つまり、こうしたツールの登場が、大学図書館における利用教育において、どのような内容を提供していくべきか、そしてそれをどのように提供したらよいのかを、大学図書館界全体で考える機会を与え、これを実践する機会を増やしていったのである。これらを支えたのが調査研究報告であり、また事例紹介論文であった。調査研究によって、図書館利用教育がどの程度導入され、どのように実践されていたのかを知ること、また事例紹介論文を通じて他大学の図書館利用教育の様子を知ることが、当時の図書館利用教育に携わっていた図書館員の大きな情報源になっていたであろうし、このサービスの普及のきっかけになったであろうことは、今日の我々にも容易に想像がつく。その意味で、図書館員の情報源であった図書館関係雑誌の果たした役割もまた、非常に大きなものであったといえる。

一方、図書館サービスとは別の活動として、各学部・学科のカリキュラムの中で、図書館利用教育が行われていたことも明らかとなった。これらを担当したのは、図書館員というよりもむしろ教員であった。こうした傾向は、基本的、一般的な内容の図書館利用教育よりも主題に関連した知識

をも扱う独立科目としての図書館利用教育に多く見受けられた。本稿では、このような動きが、大学図書館の提供する利用教育とどのような関係にあったのかを十分考察するまでには至らなかった。また、図書館利用教育を担当したのは図書館員か教員かという点についても、十分検討することができなかった。これらについては、今後の検討課題としたい。

以上のように、19世紀末に発生したアメリカの大学図書館における利用教育は、ALA 調査において1つの項目として取り上げられていることから明らかなように、1920年代には主要な図書館サービスの1つとして見なされるようになっていた。そして、その中には、今日の図書館利用教育の原型と呼べるものをいくつも見出すことができた。その意味において、1920, 30年代は、図書館利用教育史の中においても、重要な位置を占める時期であると考えることができる。

注・引用文献

- 1) Tucker, John Mark. "User education in academic libraries: a century in retrospect" *Library Trends*. Vol. 29, No. 1, 1980, p. 9-27.
- 2) 例えば、ウィリアムスは“現代図書館の発展とともに、利用指導的活動はどこでも見られる程盛んになってきたものの、1960年代迄はほとんどの活動がいわゆるオリエンテーションと呼ばれるタイプのものであった”と指摘する。(出典：ウィリアムス・みつ子。「米国大学図書館における利用指導活動の発展」『現代の図書館』Vol. 16, No. 3, 1978, p. 112.)
- 3) ACRL Bibliographic Instruction Task Force, ACRL Board of Directors. "Guidelines for Bibliographic Instruction in Academic Libraries" *College and Research Libraries News*. Vol. 38, No. 2, 1977, p. 92.
- 4) *A survey of libraries in the United States*. Chicago, Ill., American Library Association, 1926, 4 vols. ; Shores, Louis. "Library arts college, a possibility in 1954?" *School and Society*. Vol. 41, No. 1048, 1935, p. 110-4. ; Branscomb, Harvie. *Teaching with books: A study of college libraries*. Chicago, Ill., American Library Association, 1940, xi, 239p.
- 5) 当時の高等教育の変化と大学図書館との関わりについては、以下の文献を参照。
Reeves, Floyd W. and Russell, John Dale. "The relation of the college library to recent move-

- ments in higher education" *Library Quarterly*. Vol.1, No.1, 1931, p.57-66.
- 6) 小山憲司. 「アメリカの大学図書館における利用教育論の発展：1920年代から30年代を中心に」『中央大学大学院研究年報；文学研究科編』No. 27, 1998, p. 209-221.
- 7) Tucker. *op. cit.*, p. 14.
- 8) *A survey of libraries in the United States*. Chicago, Ill., American Library Association, 1926, 4 vols.
- 9) *ibid.*, Vol. 1, p. 9-10.
- 10) *ibid.*, Vol. 2, p. 192-200.
- 以下、本文中のALA調査に関する記述は、特に指示のない限り、ここからの引用による。
- 11) ALA調査の対象となっている大学図書館数についてであるが、連邦教育局による1923-24年度の教育統計によると、蔵書5,000冊以上の大学図書館は697校、そのうち20,000冊以上の大学図書館は309校であった。調査用紙を送付した大学図書館数が711館であったことから、多少の誤差はあるにせよ、蔵書5,000冊以上の大学図書館ほぼすべてを調査の対象としたことが推測できる。
- なお、同教育統計によれば、蔵書5,000冊以上の大学図書館697校は、全体857校の約8割にあたる。同様に蔵書20,000冊以上の大学図書館309校は、全体の約4割にあたる。
- また、蔵書20,000冊以上の大学図書館に限って見てみると、次のようであった。まず、蔵書100万冊以上の大学は、ハーバード大学(232万冊)、イェール大学(160万冊)の2校であった。同様に、50万冊以上の大学は、コロンビア大学(89万冊)、コーネル大学(71万冊)、シカゴ大学(70万冊)、カリフォルニア大学(63万冊)、ペンシルバニア大学(58万冊)、イリノイ大学(58万冊)、ミシガン大学(55万冊)の7校であった。さらに、蔵書10万冊以上の大学は58校、5万冊以上の大学は64校、そして2万冊以上の大学は107校であった。
- (出典：“Statistics of universities, colleges and professional schools 1923-24” *Department of the Interior Bureau of Education Bulletin*. No. 45, 1925, p. 61-62., 126-139.)
- 12) *A survey of libraries in the United States*. Vol. 1, p. 10-11.
- 13) Evans, Henry R. “Library instruction in universities, colleges, and Normal schools” *United States Bureau of Education Bulletin*. No. 34, 1914, 38p.
- 14) *A survey of libraries in the United States*. Vol. 2, p. 192-193.
- ただし、ALA調査においても、その内容が図書館の利用に関する教育が主であれば、図書館員養成や印刷物の歴史等を扱ったものもここに含めるとしている。
- 15) 例えば、コーネル大学は、書誌に関する科目として、①Introductory, ②General bibliographyという2つの科目を提供していた。その内容は次の通りである。
- ①印刷、製本、索引、分類、目録、写本の取り扱い等
- ②古代・中世の書物からインキュナブラといった初期印刷本、挿し絵、分類体系及び目録法等
- 16) ここでいう新入生オリエンテーションの概念は、レンフォードとヘンドリックソンも指摘するように、現在の通念とは異なっている。すなわち、当時のオリエンテーションは、講義と図書館ツアー、練習問題等が課されるのに対し、現在のそれは、利用者に図書館のレイアウトを紹介する、といった限定的な内容となっている。
- (出典：Renford, Beverly and Hendrickson, Linnea. *Bibliographic Instruction: A Handbook*. New York, Neal-Schuman, 1980, p.24.)
- 17) Randall, William M. *The College Library: a descriptive study of the libraries in four-year liberal arts colleges in the United States*. Chicago, Ill., University of Chicago Press, 1932, p.117-118.
- 18) Walkey, Raymond. “Library instruction for college freshmen” *Library Journal*. Vol. 49, No. 16, 1924, p. 775-777.
- 19) Drury, F.K.W. “Library orientation of freshman students” *Library Journal*. Vol. 53, No. 22, 1928, p. 1023-1025.
- 20) Barkley, Margaret. “Arrows for freshmen” *Library Journal*. Vol. 64, No. 10, 1939, p. 402-404.
- 21) Stanford, Edward B. “Freshman library orientation” *Library Journal*. Vol. 64, No. 2, 1939, p. 47-49.
- 22) Leach, Howard S. “Library orientation at Lehigh” *School and Society*. Vol. 23, No. 596, 1926, p. 683-684.
- 23) Aldrich, Ella V. “The library’s function in teaching the use of the library to beginning students” *Library Journal*. Vol. 60, No. 4, 1935, p. 146-147.
- 24) McMillen, James A. “Instruction in the use of the library” *Public Libraries*. Vol. 28, No. 7, 1923, p. 407, 470.
- 25) Eldridge, Bessie L. “An experiment in library instruction for college freshmen” *Library Journal*. Vol. 53, No. 21, 1928, p. 986-988.
- 26) Klein, Arthur J. “Survey of land-grant colleges and universities” *United States Department of the Interior Office of Education Bulletin*, No. 9, 1930, p. 626.
- ただし、ここで報告されている事例では、①利用教育担当者用の経費が不十分であること、②他の図書館業務に支障をきたすこと、の2つの理由から、それまで図書館員が担当していた利用教育を国語科の教員が担当することになった、

- というものである。
- 27) *General Catalogue: admission and degree requirements and Nomenclature of graduate and undergraduate courses of instruction 1938-1939*. Berkeley, Ca., University of California, 1938, 425p.
- 28) *ibid.*, p.263.
- 29) *ibid.*, p.381.
- 30) *ibid.*, p.370.
- 31) *ibid.*, p.290.
- 32) *ibid.*, p.19-20.
- 33) Peterson, Kenneth G. *The University of California Library at Berkeley*. Berkeley, Ca., University of California Press, 1970, p.165.
- 34) *ibid.*, p.164-165.
- 35) Young, A. Beatrice. "Let us teach library science" *School and Society*. Vol. 50, No. 1304, 1939, p. 837.
- 36) 例えば、クラインが中心となって行ったランド・グラント・カレッジ及び大学の調査によれば、大学院生を対象とする図書館利用教育は、各学科の教員が担当しており、図書館員が担当していた大学は、数校であった。
(出典：Klein *op. cit.*, p.628.)
- 37) このラボラトリー・ワークの有用性は、19世紀末には指摘されていた。以下の文献を参照。
"American Library Association, College Library Section [Proceedings, June 23 and 25, 1897]" *Library Journal*. Vol. 22, No. 10, 1897, p. 168.
- 38) メイン大学、リーハイ大学、ワシントン大学、シラキュース大学の事例には、それぞれ練習問題のサンプルが掲載されている。
- 39) Edwards, Ward. "Library instruction for college freshmen" *Library Journal*. Vol.49, No.21, 1924, p.1027-1028.
- 40) Eldridge. *op. cit.*, p.986-988.
- 41) Young, A. Beatrice. "Teaching college freshmen to make a bibliography" *School and Society*. Vol.43, No.1108, 1936, p.404-405.
- 42) Heller, Paul and Brenneman, Betsey. "A checklist for evaluating your library's handbook" *College and Research Libraries News*. Vol.49, No.2, 1988, p.78-79.
- 43) "College library handbooks" *Wilson Bulletin for Librarians*. Vol.11, No. 7, 1937, p. 479-480.
- 44) *ibid.*, p.480.
- 45) Reed, Lula Ruth. "Teaching the use of the library" *Library Journal*. Vol. 57, No. 15, 1932, p. 706-707.
- 46) このテキストブックのもととなったのは、1898年からイリノイ大学図書館で行われていた図書館利用教育科目のアウトラインと講義ノートであった。なお、この経緯については、第4版に掲載されている「第2版へのはしがき (Preface to the Second Edition)」から知ることができる。
(出典：Hutchins, Margaret, Johnson, Alice S. and Williams, Margaret S. *Guide to the use of libraries: a manual for college and university students*. 4th ed. N.Y., H.W.Wilson, 1929, 245p.)
- 47) Stanford. *op. cit.*, p. 47-49.
- 48) English, Ada J. "How shall we instruct the college freshman in the use of the library?" *School and Society*. Vol. 24, No. 626, 1926, p. 785.
- 49) "Bell and Howell to lend film" *Library Journal*. Vol. 62, No. 9, 1937, p. 390.
なお、ベル・アンド・ハウエル社は1907年にシカゴに設立され、映画カメラや映写機器等の製造を主な業務としていた。現在では、情報アクセス及び送信のためのソリューションを提供する情報サービス会社である。
(出典：『外国会社年鑑：1998年版』東京，日本経済新聞社，1998，p.844; Bell & Howell Company
ホームページ <http://www.bellhowell.com/intro.html/>)
- 50) "Instruction in use of books and libraries in colleges and universities" In *Report of the Commissioner of Education for the year ended June 30, 1912*. Washington D.C., U.S. Government Printing Office, 1914, p.380-384.
- 51) English. *op. cit.*, p.779-785. ; Baber, C.P. "Freshman courses in the use of the library" *Library Journal*. Vol. 53, No. 22, 1928, p. 1041-1042.
- 52) "Instruction in use of books and libraries in colleges and universities" *op. cit.*, p.380-381.
- 53) 『世界大百科事典；1』東京，平凡社，1989，p.486-488の「アメリカ映画」の項を参照。

Academic Libraray-use-instruction in the United States in 1920's and 1930's

Kenji KOYAMA

Graduate School of Literature, Chuo University

According to the survey of the ALA in 1926, academic libraray-use-instruction was generally done by following three types; (1) library-use orientation, (2) library-use-instrucion in relation with regular courses, e.g. English courses, (3) independent courses in regular curriculum, with lectures and practice works. Library handbook, textbook and even motion pictures were used as instruction tools. These types of instruction in 1920's and 1930's seemed to be a root of those in present days.